

ARSe300GA

国際社会演習－朝鮮半島と日本－

高柳 俊男

配当年次／単位：3～4年／4単位

旧科目名：

旧科目との重複履修：

毎年・隔年：毎年開講 | 開講セメスター：春・秋

人数制限・選抜・抽選：選抜

他学部への公開：×

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

2015年は、戦後70年、すなわち日本の朝鮮植民地支配の終焉から70年であると同時に、日本と韓国が過去を清算し、国交を樹立してから50周年に当たる、まさに節目の年であった。

現在、隣国の韓国に向けた日本の視線には、K-POPをはじめ韓流による関心や憧れがある一方で、領土問題や歴史問題をめぐって軋轢や厳しい見方もある。もう一つの北朝鮮には、かつては熱い視線が注がれた時代もあったが、いまだ国交がなく、ミサイル発射や粗末な漁船の漂着など、冷やかな眺めが支配的である。

どうしてこのような現状になっているのであろうか？ そこに至るまでの間には、どのような出来事や人々の営みがあったのだろうか？ 状況を少しでも良い方向に動かしていくためには、何が必要なのだろうか？

この授業では、日本と朝鮮半島の間複雑に絡まっている糸を、少しずつ解いていく作業をする。それを踏まえてあるべき未来を考察することをめざしたい。なかでも、現在は埋もれてしまっている貴重な歴史的諸経験や未発の可能性を掘り起こすことに力を注ぎたい。

同時に、朝鮮問題を中心にしながらも、日本の異文化理解や多文化共生・多民族共生全般という、より広い文脈の中で捉えることを心がける。

私の演習では、理論から出発するようなアプローチは採らない。むしろ受講生たちが具体的な諸事実をとことん突き詰めるなかで、自らの認識を深化させること——いわば個別を極めることを通じて普遍に至るような学び方を身につけることを重視したい。

【到達目標】

日本と朝鮮半島が歩んできた歴史と現在、およびその中で営まれた人々の思索と行動の軌跡を、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解する。理解した内容を、受け売りではなく、自ら紡いだ言葉で語れるようにすることを目標とする。

【授業の進め方と方法】

第1回目に、参加ゼミ生個々人がこれまで読んで感銘を受けた韓国・朝鮮関連の本で、ぜひ他のメンバーと議論したい作品を挙げてもらう。それらをリスト化し、個々人の読書の参考にするとともに、一部を年間スケジュールの中にも組み込みたい。

第2回目以降は、まずウォーミングアップから始め、高柳が執筆したいいくつかの関連文献を、導入教材として読む。

続いて今年度のテキストに入る。これは、明治時代から現在まで、朝鮮や朝鮮人（総称）とさまざまな形で関わりをもった日本人36人を取り上げ、その関係・交流や認識などを具体的に論じたものである。各自には、ウォーミングアップの時期にテキスト全体に目を通し、自分が取り上げたい人物を選定してもらい、それに基づきテキストから春学期と秋学期に最低1回ずつ報告してもらう。

発表の際には、取り上げた人物自身が書いた関連文章（30頁以内の比較的短いもの）を事前に別途配付し、それも含めた報告とする。関連文章の選定に際しては、テキストの記載のほか、その人物の全集や著作集（あれば）、あるいは後述する参考文献類などを参照する。毎回の討論の中で出た疑問点・不足点を、レポーターに次回冒頭で補足してもらい、知識・認識の深化をはかる。

関連映像の視聴を随時まじえ、夏季休業期間などを利用した合宿や関連スポットへのフィールドワークも、受講生の自発性と創意工夫に基づき適宜実施したい。

なお、可能なら、授業の最後に編者（本学出身）にお出でいただくことも考えたい。また、2018年度は、こうしたテーマに関心をもつ小林瑞乃先生（青山学院女子短期大学）が私のもとで国内研究に従事することになっているので、演習にも随時参加していただくかもしれない。

朝鮮語ができる人には、関連する朝鮮語文献を活用していただくが、朝鮮語能力はこの演習を受講するにあたっての必要条件ではない。

また、授業は登録上では1コマだが、4限と5限にまたがって行なうので、ほかの授業やアルバイトを入れないこと。

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講者の自己紹介、自分の推薦する本、年間授業スケジュールの確認、導入教材の配付、レファレンスブックの紹介など
第2回	導入教材①	高柳執筆の論文①を読む
第3回	導入教材②	高柳執筆の論文②を読む
第4回	導入教材③	高柳執筆の論文③を読む
第5回	映像上映①	学習内容の映像による確認
第6回	テキスト導入	これからテキストを講読するにあたって、まず編者である館野哲氏について、他にどんな著作があるか、新聞・雑誌でどんな報道がなされているかについて確認する
第7回	テキストの個人報告①	レポーターの報告と全員による討論
第8回	テキストの個人報告②	レポーターの報告と全員による討論
第9回	映像上映②	学習内容の映像による確認
第10回	テキストの個人報告③	レポーターの報告と全員による討論
第11回	テキストの個人報告④	レポーターの報告と全員による討論
第12回	映像上映③	学習内容の映像による確認
第13回	テキストの個人報告⑤	レポーターの報告と全員による討論
第14回	春学期のまとめ	春学期の学習のまとめと、夏季休業中の学習計画の策定

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	秋学期の導入①	夏季休業中の各自の学習成果の報告（一人10分程度）
第2回	秋学期の導入②	夏季休業中の関連新聞記事の分析（朝日／毎日）
第3回	秋学期の導入③	夏季休業中の関連新聞記事の分析（読売／韓国の新聞）
第4回	映像上映④	学習内容の映像による確認
第5回	テキストの個人報告⑥	レポーターの報告と全員による討論
第6回	テキストの個人報告⑦	レポーターの報告と全員による討論
第7回	テキストの個人報告⑧	レポーターの報告と全員による討論
第8回	映像上映⑤	学習内容の映像による確認
第9回	テキストの個人報告⑨	レポーターの報告と全員による討論
第10回	テキストの個人報告⑩	レポーターの報告と全員による討論
第11回	映像上映⑥	学習内容の映像による確認
第12回	ゲスト講師を囲んで	テキスト編者の館野哲氏をお迎えして、さらに議論を深める
第13回	ゼミ生推薦の本の読書会	年度始めにゼミ生全員が推奨した本の中から1冊を選び、全員で読んで討論する
第14回	年間のまとめ	年間の学習のまとめと、春季休業中の学習計画の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で紹介する各種参考文献の講読、関連スポットへの訪問、学内外における関連イベントへの参加など。とくに、編者自身の他の著書にも目を通すことを勧めたい。

また、別の科目になるが、自らの大学時代の学びの集大成として、4年次秋学期に「卒業研究」を提出して卒業できるよう、日頃から作成に向けた準備を念頭に置きながら演習にも臨むことが望ましい。

なお、日本近現代史・東アジア近現代史の大きな流れについて、高校で習う程度の基礎知識を前提にするので、不足を感じる人は自分で補うよう努めること。

【テキスト（教科書）】

館野哲編『韓国・朝鮮と向き合った 36 人の日本人』（明石書店、2002 年）。ただし、すでに絶版なので、こちら側で人数分を用意する。

【参考書】

レファレンスブックとして、『朝鮮を知る事典』（平凡社）、『朝鮮人物事典』（大和書房）、『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』、『在日コリアン辞典』（明石書店）などを随時参照すること。韓国・朝鮮について深く考えたいと願う人は、自分で購入し、ゼミに持参することを強く推奨する。

単行本としては、同じ編者による同『36 人の日本人：韓国・朝鮮へのまなざし』をとくに参照し、できれば購入することが望ましい。

それ以外では、たとえば、古典的な旗田巍『日本人の朝鮮観』や朴春日『近代日本文学における朝鮮像』をはじめ、高崎隆治『文学のなかの朝鮮人像』、渡邊一民『「他者」としての朝鮮：文学的考察』、小川圭治・池明観編『日韓キリスト教関係史資料』、李修京編『韓国と日本の交流の記憶：日韓の未来を共に築くために』、琴秉洞『日本人の朝鮮観』、『朝鮮人の日本観』、鄭大均編『日韓併合期ベストエッセイ集』、朴裕河『引揚げ文学論序説：新たなポストコロナルへ』などを、文献目録としては園部裕之編『近代日本人の朝鮮認識に関する研究文献目録』などを参照するとよい。

【成績評価の方法と基準】

演習なので、担当するレポーターはもちろん、それ以外のゼミ生も毎回事前にテキストを読み込み、ポイントを把握して来たうえで出席し、必ず何かしら自分なりの見解を表明することが大切である。そうした平常時の貢献度と発表時の報告内容を 35 % ずつ、各学期末のレポートを 30 % として判断する。

【学生の意見等からの気づき】

ゼミはサークルや「仲良しクラブ」ではないが、かといって参加者個人の孤独な作業とも異なる。探究心に溢れた一人一人の営みの上に、みなで切磋琢磨できるような場となるよう、ともに努力していきたい。

【その他の重要事項】

年間を通して、「知の蓄積」という課題を常に考えながら学んでいきたい。

その意味は、一つはこれまでの長い歴史の中で蓄積されてきた人類の膨大な知をどう活用できるかという課題、もう一つは自分の中に知をどう蓄積していけるかという課題を指している。

とくに後者については、一度学んだ内容が再度登場した場合、より高いレベルで考えられるようにするためにはどうしたらよいかを、常に念頭において取り組んでほしい。すなわち、漫然とした受け身の学びではなく、真に能動的な学びとはどうあるべきかという問いかけである。

そのためには、具体的にこだわること、すなわち演習内で登場する人名や事件名などの固有名詞を疎かにしない学びが決定的に重要だと考える。実際に、以前の授業で登場した人物であるにもかかわらず、まるで初めて出てきたような触れられ方をしたことがしばしばあるので、この点はとくに強調しておきたい。